

■（５３）事件や事故の発生を素早くつかむには？

２３年前の春、赴任した山陰地方の支局は異様な光景だった。玄関前にパトカーが２４時間とまり、２人の警察官が支局の出入りチェックしていた。前年に阪神支局襲撃事件が起き、記者が何者かに射殺されていたからだ。記者は命がけ、と思い知らされた。

権力監視も役割の一つとされる新聞が、事件の再発防止を図る警察に守られる格好だった。ただ、仕事上の距離感是不変わらない。警察は基本的に情報を出したがない。ならば記者はどうやって事件や事故の発生をつかむのか。基本はサイレンだ。パトカーや消防車などがけたたましく鳴らしながら走る。それが聞こえたら警察署や消防署に何が起きたのかを電話などで確認する。そんな地道な作業の繰り返した。当時は上司から、暑くても寒くても車の窓を閉めてはいけない、と言われた。音が聞こえにくくなるからが理由だった。

もちろん正式な広報もある。が、発生から時間がたっていて、火事も消えた後ということもある。それでは生々しい現場は伝えられない。新人時代の上司の指示はやや極端だったかもしれないが、サイレンの警戒が重要であることは、今も変わらない。（山）